SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

アンデスの毛沢東：先住民、プロレタリアート、農民 (中国文化大革命と国際社会：50年後の省察と展望：国際社会と中国文化大革命)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 静岡大学人文社会科学部アジア研究センター 公開日: 2016-05-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 細谷, 広美 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00009403

アンデスの毛沢東
―先住民、プロレタリアート、農民―

細谷広美

1　はじめに

1980年代前半メキシコで学んでいた頃、国立人類学博物館もあるメキシコ・シティの市民の憩いの場所、チャプルテペック公園に週末に行くと、家族連れでにぎわい様々な出店がでている巨大な公園の一角で、中国の帽子、バッジ、人民服、中国の雑誌が路上で売られていた。当時のメキシコでは、社会の教科書の日本に関する記述の箇所に、人民服姿で働く中国人の写真が掲載されているくらいアジアは遠かったが、はるか遠い中国で達成された中国革命への憧憬がみられた。

ラテンアメリカの60年代～80年代は内戦、軍事政権、革命の夢が渦巻いた。1953年から1959年にかけておこなわれたキューバ革命に参加し、フィデル・カストロとともに闘ったチェ・ゲバラは、キューバ人ではなく南米アルゼンチン出身だった。アルゼンチンの首都ブエノスアイレスは、スペインとイタリア移民が多い。アニメでおなじみの「母をたずねて3千里」のマルコ少年は、イタリアのジェノバからアルゼンチンのブエノスアイレスに働きに行ったお母さんを探して旅をする。このため、スペイン語にイタリア語の香りがついたアルゼンチンでは、他の人に呼びかけるときに「チェ」という。この言葉がゲバラの愛称となり、エルネスト・ゲバラは「チェ・ゲバラ」と呼ばれるようになった。そして、チェ・ゲバラとなったゲバラはキューバ革命に参加することになる。

キューバ革命は成功したが、革命後の国家建設の過程でカストロとゲバラの間の溝が深まるなか、ゲバラはカストロに別れの手紙を残し再びゲリラ闘争を展開する。キューバを後にしたゲバラが赴いたのは南米ボリビアであった。ゲバラは世界革命を夢みた。しかし、ゲバラがまだキューバにいた頃に派遣されたアフリカのコンゴにおいても、ボリビアにおいても、ゲバラは民衆から歓迎されなかった。先住民人口の割合が高いボリビアで外から持ち込まれた世界革命のイデオロギーは、現地の「民衆」の現実からは遠かった。

キューバ革命は、冷戦下にあるアメリカ合衆国の、その後数十年にわたって続く政策を決定づけることになった。アメリカ合衆国にとっては目と鼻の先のキューバで革命がおこり社会主義政権が誕生したことで、あわや全面核戦争に発展しかねないキューバ危機が起こった。この後アメリカ合衆国は、メキシコ以南の国々が左翼化し反米化することへの脅威への警戒をさらに強めていく。冷戦下、ソビエト連邦

とアメリカ合衆国の直接の戦争がおこなわれることはなかったが、かわりに東西陣営がそれぞれ支援する勢力間で代理戦争がおこなわれることで、中米諸国は内戦状態になった。

南米では1970年にチリで自由選挙によってサルバドル・アジェンデが大統領となり社会主義政権が誕生している。しかし、アメリカ合衆国の支援もあり1973年9月11日にアウグスト・ピノチェト将軍による軍事クーデターがおこなわれ、アジェンデ政権は崩壊した。クーデターの際、アジェンデ大統領も命を落としている。奇しくもアメリカ合衆国での同時多発テロと同じ日付であるが、ラテンアメリカでは「9.11」は、世界初の自由選挙によって誕生した社会主義政権が、軍事クーデターによって倒れた日を意味してきた。その後、軍事政権であったチリ、アルゼンチン、ウルグアイ、パラグアイ、ボリビア、ブラジルは共産主義とソビエト連邦の影響を共同で根絶する「コンドル作戦」を実施した。これらの国々では多くの行方不明者（desaparecidoデスアパレシド）がでた。チリのピノチェト将軍による軍事独裁政権は、ピノチェトが選挙で敗北し民政移管がおこなわれる1990年まで続いた。

前述のメキシコのチャプルテペック公園には、1847年のアメリカ合衆国との戦争で砦を防衛しようとした士官学校の6人の少年たちの英雄的行為を称えたモニュメントがある。このメキシコ人ならばだれもが知っていた少年たちの逸話は、メキシコのNAFTA（North American Free Trade Agreement：北米自由貿易協定）への加入によりアメリカ合衆国と良好な関係を結びたい政府の意向のもと、教科書から消されることとなった。これについては、学校教員の強い反発を招くとともに、NAFTAの締結はサパティスタによる反乱につながることになった。しかし、他方でNAFTAの締結は、メキシコが国際社会に対して人権の尊重への説明責任（accountability）をおうことを意識せざるをえなくなることを意味した。逆説的ではあるが、政府軍が一方的に武力制圧をすることが困難になったことがサパティスタにとっては好機となった。つまり、サパティスタの反乱は二重の意味でグローバル化の申し子だったのである。

ラテンアメリカは経済的危機にみまわれた「失われた10年」を経て、80年代にあらわれた新自由主義に舵をきり、90年代は本格的に新自由主義の時代に入っていく。他方でアメリカ合衆国の関心が中東やイスラム世界に向かうなか、ラテンアメリカ諸国の一部では左翼化がすすみ、ベネズエラのチャベス政権のような政権が生まれている。そして現在、格差をはじめとするグローバル化のひずみに直面している。このことは、たとえば端的にブラジルにおける反オリンピック運動にも示される。

国民国家を論じたベネディクト・アンダーソンは、冷戦下で初版が出版された『想像の共同体』の序論で（アンダーソン2007）、マルクス主義とナショナリズムの関係について論じ、共産主義や社会主義が国家様態をとってきていることの矛盾を指

摘している。ラテンアメリカではその歴史的背景から、多くの国で先住民が農民となっている。それ故、毛沢東主義との関係を考察するうえでは、加えて人種、民族、文化的多様性とどのようにかかわり、ローカライズされたのかということを視野に入れる必要がある。本稿では、1980年に南米ペルーで武装闘争を開始した毛沢東系の集団「ペルー共産党―センデロ・ルミノソ（El Partido Comunista del Perú-Sendero Luminoso：PCP-SL）」（以下センデロ・ルミノソと略す）と先住民の関係に焦点をあててみていく。

1980年から2000年に起こった暴力と人権侵害について調査したペルー真実和解委員会の調査報告書によると、この間の死者及び行方不明者数は約7万人であり、このうち75％が先住民言語の話者であったと推計されている（Comisión de la Verdad y Reconciliación：CVR2003）。インカ帝国の中心が位置していたペルーの先住民人口の割合は、ラテンアメリカ諸国のなかでも比較的高く30％～40％弱を占める。しかし、この数を考慮しても、紛争の被害が先住民に集中していたことがわかる。さらに、死者・行方不明者数のうち40％はセンデロ・ルミノソが武装闘争を開始した山岳部のアンデス地域に位置するアヤクチョ県の犠牲者であった。

2　マルクス主義とインディヘニスモ

「ペルー共産党―センデロ・ルミノソ」の「センデロ・ルミノソ（Sendero Luminoso：輝ける道）」という名称は、ペルーの政治思想家でジャーナリストでもあったホセ・カルロス・マリアテギ（José Carlos Mariátegui 1894–1930）の書からとられている[1)]。

マリアテギは1894年にペルー南部の街モケグアで生まれ、「ラテンアメリカ最初のマルクス主義者」と称されている人物である。ジャーナリストとしてキャリアをはじめた彼は、労働運動を支援し反政府運動に関わったことで国外追放となった。しかし、旧家の血をひいており、時のレギーア大統領の親戚でもあったため、イタリア駐在外交官という名目でイタリアに送られヨーロッパで4年間を過ごした。その際、マリアテギはマルクス主義思想を知ることになった。しかし、それに留まらず、母国に戻るとヨーロッパとは異なるペルーの現実を視野に入れ、マルクス主義と「インディヘニスモ（indigenismo）」と呼ばれる先住民主義を融合した独自の政

---

1)　ゲバラは、メキシコでフィデル・カストロと知り合い革命に参加するようになる以前、すなわちチェ・ゲバラとなる前の医大生であった時代に、友人とオートバイで南アメリカを貧乏旅行している。このとき、ペルーでマリアテギの思想にふれている。裕福な家庭に生まれたゲバラは、この旅でチリの鉱山労働者や先住民の貧困を目の当たりにする。『モーターサイクル・ダイアリーズ』（ゲバラ2004）と名付けられた旅の記録は映画化もされた。

治思想に基づく執筆活動を開始した。マリアテギは若くして亡くなったが、インディオ[2]問題を土地問題として位置づける一方インディオ文化の称揚をおこない、代表作『ペルーの現実解釈のための七試論（*7 ensayos de interpretación de la realidad peruana*）』（1928年）をはじめとする多くの著書を出版した[3]。

ここで、なぜラテンアメリカにおいてマルクス主義に「インディヘニスモ」と呼ばれる先住民主義が関わってくるのか、その背景をみておく必要があるだろう。周知のようにラテンアメリカの多くの国々はスペインによる植民地支配を受けている。コロンブス[4]が新大陸に到達した後、スペイン人の征服者（コンキスタドール）たちによるアメリカ大陸征服がはじまった[5]。約300年間にわたる植民地支配が続いた後、中南米の国々の多くは19世紀初頭に独立していく。しかしながら、植民地宗主国スペインからの独立は征服の時点で支配された人々、すなわち先住民の手によるものではなく、征服後に入植してきたヨーロッパの人々の子孫によっておこなわれた。

征服後アメリカ大陸では、ヨーロッパの人々が持ち込んだ疫病が、抗体をもたない人々の間で大流行し先住民人口は激減した。地域を支配しても労働力を確保しなければ利益を上げることはできないことから、奴隷貿易を通じてアフリカからの黒人奴隷の導入がはじまる。この結果、地域には先住民に加え、入植してきた白人の人々、黒人、そしてこれらの人々の混血という人種構成が生まれた。そこに植民地時代を通じて白人を頂点とする人種間のヒエラルキー関係が形成された。

しかしながら、同じ白人の間でもヨーロッパ出身の人々と新大陸生まれの人々の間には差別が存在した。ヨーロッパ出身の白人は、アメリカ大陸生まれの白人を劣位の存在として扱ったのである。このため、独立は植民地宗主国スペインに支配されることに不満を抱いた入植者の子孫たち、すなわちクリオリョ（criollo）たちの

---

2) スペイン語のインディオ（*indio*）は、現在は差別用語としてみなされ、先住民を指すには英語のindigenous peopleに相当する*indígena*という単語が用いられている。しかし、インディオは歴史的に、先住民を指す言葉として使用されてきており、マリアテギもインディオという言葉を用いている。

3) 日本語では2冊の翻訳（マリアテギ1988,1999）と小倉英敬（小倉2002,2012）によるマリアテギをめぐる論集が出版されている。

4) コロンブスは現在のイタリア出身であるが、スペインのカスティリャの王であったイサベル女王の承認を受け、現在のアジアに相当するインディアスに到達する最短の道を探して航海に乗り出し、1492年にアメリカ大陸に到達した。ちなみに、コロンブスは終生自分が到達した地はインディアスの一部と考えたまま亡くなっている。

5) アメリカ大陸には、メソアメリカと中央アンデスという二つの高文明地域があったが、現在のメキシコを中心とする地に王国を築いていたアステカ王国をエルナン・コルテスが征服し、現在のペルーを中心として広大な領域をその支配下においていたインカ帝国をフランシスコ・ピサロが征服した。インカ帝国の皇帝アタワルパは、1532年にペルー北部の街カハマルカで征服者たちの奸計によって捕らえられた後、1533年に絞首刑に処された。その後、スペイン人は太平洋に面したリマに街を建設し副王領の中心とする。ここを拠点とし、スペインは南アメリカへの支配を拡大していった。

手によって実行された。つまり、大枠でみれば、独立は白人が白人に対しておこなったものであった。このため、独立によって植民地時代に形成された人種間のヒエラルキー関係が大きく変わることがなかったのである。

人種間のヒエラルキー関係は、経済格差と密接に結びついた。ラテンアメリカの多くの国で、一握りの白人が大土地所有者として土地を占有し、先住民は奴隷同然の小作農となった。ペルーでは大土地所有者による寡頭支配体制が続いた。このため、先住民は貧困層を形成することになった。この貧しい先住民は、マルクス主義の階級の言説が適用された場合はプロレタリアートとなり、毛沢東主義が適用された場合は土地をもたない小作農となった。ただし、ここで注目すべきは、文化や人種という観点からみた場合、貧しい先住民が、階級闘争の言説のなかで、ブルジョアジーに対するプロレタリアートや農民として位置づけられるとき、先住民が有する文化や宗教的独自性への尊重を必ずしも伴っていなかったという点である。つまり、先住民という存在を階級の枠組みに位置づけることは、今日の文化相対主義にみられるような先住民文化を価値あるものとみなすことを必ずしも意味していなかった。ここにマルクス主義や毛沢東主義と初期のインディヘニスモとの特殊なかたちの邂逅が産まれた。

インディヘスニモは先住民主義と訳されるが、歴史的には先住民の手による運動としてははじまっていない。インディヘニスモはむしろ非先住民の知識人による先住民の復権運動としてはじまっている[6)]。しかも、初期のインディヘニスモが、国民国家の建設や国民統合の政策と結びついた際には、国民としての先住民の近代化というかたちをとった。すなわち、先住民文化を前近代的とみなし、先住民にスペイン語を教え近代化することが目指された。「よきインディオとは死んだインディオ」という言葉に代表されるように、輝かしい古代文明を築いたインディオはよいインディオであっても、今生きているインディオは堕落した存在であるとみなす。このことは、結果として人類学でいう同化政策を意味してしまうという現象がみられたのである[7)]。

人類学の分野においても、人類学とマルクス主義の邂逅はラテンアメリカにおいては特殊なかたちをとった。日本ではマルクス主義人類学は、人類学における思想的パラダイムの転換や一理論として観念的にとらえられがちである。しかし、先住民人口を多く抱え、圧倒的な経済格差があるラテンアメリカにおいては実践を意味

---

6) ペルーのインディヘニスモについてはアルゲダス（1988）参照。

7) ただし、歴史的文脈でみれば、こうした見解もそれ以前の進化論的な人種、民族観において、先住民が生物学的に劣っているとしていたことに比すれば進展ではあった。ラテンアメリカでは「宇宙的人種」ということがいわれても、オーストラリアやカナダのように、先住民を生物学的に劣っているとすることで、具体的な政策として混血が推進されることはなかった。

した。加えて、日本では戦後、国内の社会や文化を対象に研究する日本民俗学、海外の社会、文化を対象に研究する文化人類学というすみわけがおこなわれてきた。もちろん人類学者になるトレーニングの過程でのフィールドワークは日本で実施されてきているし、日本と海外の双方を研究対象にしている人類学者も少なくない。しかし、ラテンアメリカでは文化人類学は、主として国内の異文化を研究する学問という役割を果たしてきた。

このため、たとえばノーベル文学賞を受賞したオクタビオ・バスは80年代に、自らも編集に関わっていた雑誌のなかで、かつてレヴィ＝ストロースがメキシコを訪れた際に、レヴィ＝ストロースが世界中でメキシコほど人類学という学問が知られている国はないと賞賛したと記し、当時のメキシコ人類学の現状を嘆いている。メキシコでは70年代から80年代にかけて人類学が大きくマルクス主義人類学に傾いた。人類学のカリキュラムにおいて『資本論』を読むことが必須となり、アルチュセールやグラムシなどがテキストとして用いられた。マルクス主義やマルクス主義人類学そのものが問題であるというわけではない。しかし、主流となったマルクス主義人類学においては、先住民を階級の枠組みでとらえ、文化への関心が後退し、むしろ先住民文化を近代化から遅れたものとしてとらえる傾向がみられた[8)]。

この点においては、先住民文化に関する具体的な知識をもたなかったにせよ、先住民文化の称揚をおこなったマリアテギは立場を異にしている。

3　紛争前夜とセンデロ・ルミノソ

ペルーの紛争は、前述のように1980年にセンデロ・ルミノソが武装闘争を開始したことによってはじまっている。センデロ・ルミノソのリーダーは、山岳部のアヤクチョ県にある国立サン・クリストバル・デ・ワマンガ大学（以下、国立ワマンガ大学と略す）の元哲学教授のアビマエル・グスマン・レイノソである。

センデロ・ルミノソが、ペルー山岳部のアヤクチョ県で組織化し武装闘争を開始したことには意味があった。ペルーはアンデス山脈が縦断していることにより、その自然環境は首都リマを中心とする太平洋に面した海岸部（コスタ costa）、アンデス山脈の山岳部（シエラ sierra）、アマゾン川が流れる熱帯雨林地域（セルバ selva, モンターニャ montaña）に大きく分けられる（図1）。この自然区分は人種・民族的区分とも密接に関連しており、海岸部は白人、メスティソ（混血）が多く居住し、山岳部は先住民人口を多く抱える。ちなみにインカ帝国の中心であったクスコは海

8)　当時のメキシコでは、国内で唯一人類学の大学院を有していたメキシコ国立人類学歴史学大学の学生たちが、教員とともに先住民地域＝農村地域に調査に行き、マルクス主義を説く学生が教会と対立したことで、村人たちに包囲されて地元警察に救出を求めるということも起こった。

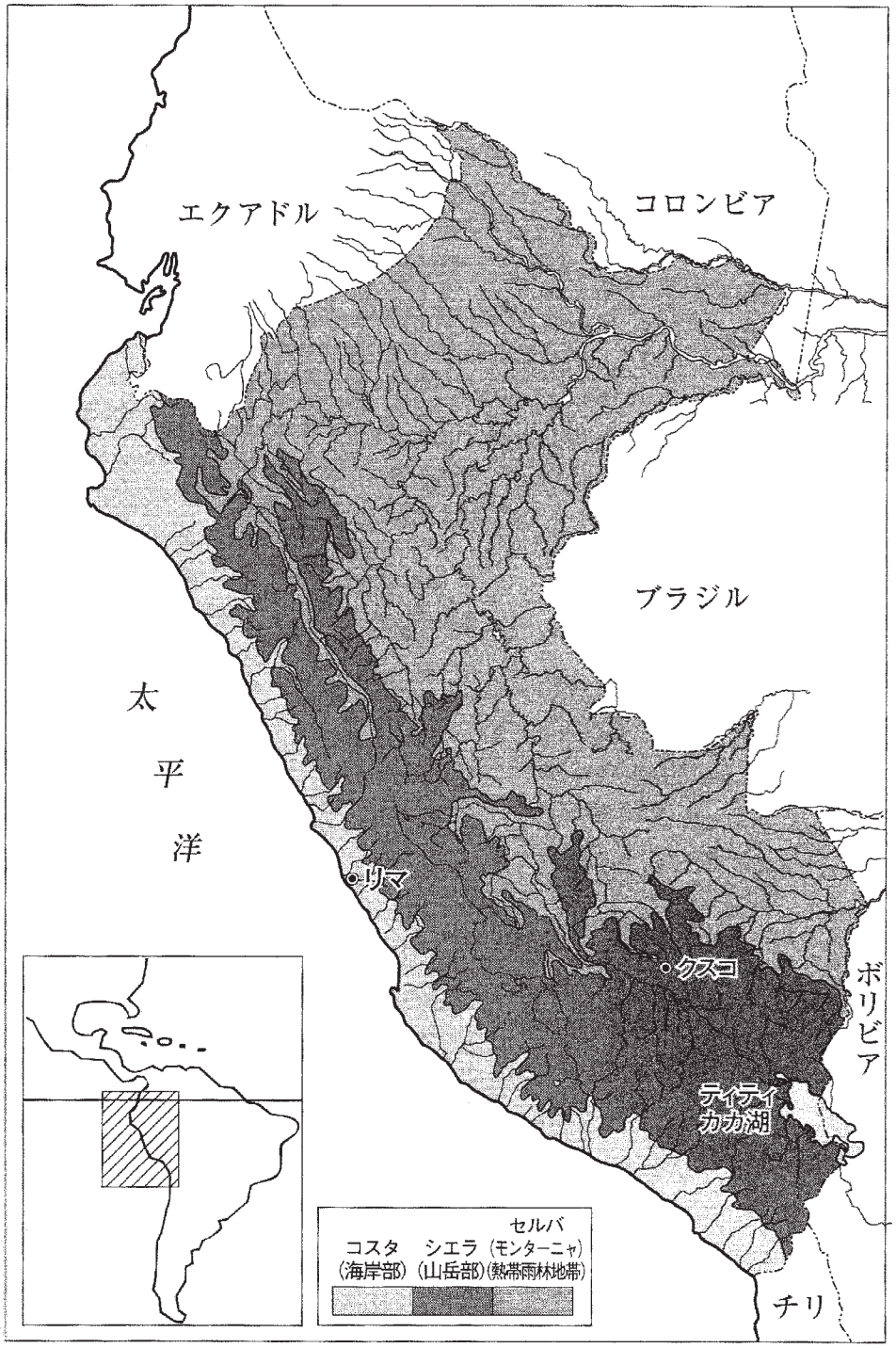

図1　ペルーの自然区分　出典（細谷編2012）

抜約3400mの高地に位置する。熱帯雨林地域はもともと人口密度が低い地域だが近年は資源開発で注目されている。他方で、1940年代以降山岳部から海岸部への移住を中心とする首都圏への人口集中が進み、リマ首都圏は全人口の3分の1弱を抱えるメガポリスとなっている。

このようなことから、ペルーには山岳部と海岸部の間で国内植民地的状況が存在しており、西欧的な様相をもつリマと、アンデス文化と呼ばれるいわゆる先住民文化が色濃くみられる山岳部との間は、アンデス山脈によって隔てられてきた。しかも、海岸部に比して農村が広がる山岳部は貧しい県が多く、アヤクチョ県はペルーで最も貧しい県の一つとなっていた。センデロ・ルミノソは、毛沢東に倣い「農村から都市を囲む」という戦略をとり、山岳部の農村部で武装闘争を開始した後、山岳部の都市に進み、最終的に首都リマを制圧することを目指した。しかし、ペルーの社会的脈絡では山岳部の農村地帯は同時に先住民地域を意味していた。

国立ワマンガ大学はアヤクチョ県唯一の国立大学で、アヤクチョ県の中心アヤクチョ市に位置する。アヤクチョ市は、街を一歩出れば農村地帯が広がる地方の小都市である。しかし、歴史的にはワマンガと呼ばれ、大量の銀が発見されたポトシ銀山とペルー副王領の中心リマを結ぶ位置にあり、植民地時代には非常に栄えた。この豊かさを背景に職人が集まり手工芸技術の発展がみられた。当時の栄華の名残として、現在も街のいたるところに教会がある。また、近郊のキヌア村は、南アメリカのスペインからの独立を決定づけることになった「アヤクチョの戦い」が闘われた場所であり、各国からの支援のもとに建造された巨大な白い塔のモニュメントがある。しかし、現在のアヤクチョ県は農業地域として、工芸品を除けば目をひく産業もない貧しい県となっている。

国立ワマンガ大学は1677年に創立された非常に古い大学であるが、植民地体制を揺るがす大規模な反乱となったトゥパック・アマルの反乱後閉鎖されていた。この大学が1959年に再開されたことで、山岳部の農村部の子弟にも高等教育を受ける機会が生まれた。再開されたワマンガ大学には、アメリカ人のトム・ズイデマ、ペルー人のルイス・ミリョネス等、その後国際的に活躍する人類学者が集まった。

海岸部出身でカント哲学をおさめたグスマンは、1962年に国立ワマンガ大学の哲学教員に就任している。グスマンは若い頃にペルー共産党に入党している。彼は1960年代に中国を訪問し、毛沢東主義の影響を受けた。しかし、グスマンは自らをマルクス、レーニン、毛沢東に続く4番目として、毛沢東の死後の鄧小平による改革開放は修正主義として批判した。国立ワマンガ大学では、センデロ・ルミノソに賛同する教員が大学の授業で革命教育をおこなうことで、その思想的影響を受けた若い学生たちがセンデロ・ルミノソに加わっていった。さらに、国立ワマンガ大学で教育を受けた少なからざる数の学生たちが、アヤクチョ県内の農村部で教員とし

て働いており、このなかにセンデロ・ルミノソに参加、またはその影響下にある者たちが含まれていた。彼らが農村部で若年層に革命教育をおこなった。

グスマンが国立ワマンガ大学に就任した当時の学長は、著名な人類学者エフレイン・モロテ・ベストであった。モロテ・ベストは弁護士でもあり、大土地所有者（アセンダド）の搾取や土地の収奪にあえぐ農民たちを支援し深く尊敬された。モロテ・ベストの息子のオスマン・モロテ・バリオヌエボも人類学者であった。オスマンはセンデロ・ルミノソのナンバー2となり、1988年に逮捕され現在も獄中にある。人類学者や人類学徒たちは農村部でフィールドワークを実施していたが、紛争によって農村部でのフィールドワークが困難になっただけでなく、国立ワマンガ大学の人類学者たちも殺害されたり、脅迫によって県外や国外に亡命せざるをえないという状況におかれた。人類学科は紛争の中途で閉鎖された。

センデロ・ルミノソが、武装闘争を開始した最初の攻撃対象となったのは、アヤクチョ県のチュスチ村という先住民言語ケチュア語話者の村であった。ケチュア語はインカ帝国の公用語であった言語で、ペルーの先住民の大半がこの言語の話者である。1980年5月17日、軍事政権後おこなわれた最初の選挙の際にこの村で投票箱が燃やされた。実はチュスチ村は文化人類学的にはよく知られた村である。アメリカの人類学徒ヴィージェ・ジーン・イズベル（Bille Jean Isbell）が、夫の考古学者ウイリアム・イズベル（William Isbell）とともに70年代にアヤクチョに赴き、センデロ・ルミノソの武装闘争がはじまる前夜のチュスチ村でフィルドワークを実施し博士論文を執筆した。さらに、博士論文をもとに、*To Defend Ourselves*：*Ecology and Ritual in an Andean Village*（1985）というタイトルの民族誌を出版している。

この民族誌自体は、当時文化人類学の分野で主流であった構造主義を理論的基盤とし、人々の生態環境とコスモロジーを分析する内容となっている。しかし、そのなかにはペルー革命を実施した軍事政権が国民統合をおこなう過程で、村落の政治組織を国内の官僚機構の末端に位置づけようとするなか、村落内の伝統的政治宗教的権威組織バラヨック（*varayoq*）[9] と村長を中心とする新たな政治組織が村落内に連立し、伝統的村の組織と国家の組織のなかで人々が揺れ動いている様子が垣間見られる。異なる政治組織間の関係は、世代間の対立とまではいえないまでも、世代の移行と関わっていた様が示されている。

さらに、村は孤立していたわけではなく、村からすでにリマへ移住している人々がおり、この移住者たちが村に及ぼしている影響についてもふれられている。村人たちは、村から移住し村の人々が履くオホタ（*ojota*）と呼ばれる古タイヤで作った

---

9) *varayoq*については細谷1997参照。バラヨックはクスコ県のケチュア語ではバラヨックと発音されるが、アヤクチョ県のケチュア語ではバラヨッフと発音される。

サンダルを脱いだ人々をケチュア語で*qala*（ハラ、カラ）と呼び、自分たちとは区別している。*qala*はスペイン語を話し、村の伝統的衣服とは異なる西洋風の衣服を身につけオホタをはかなくなった、いわばメスティソとなった人々を意味する。*qala*とは別に、白人、メスティソなど非先住民である人々を指す一般的な言葉として*misti*（ミスティ）がある。また、都市部では山岳部の農村部出身の先住民及びメスティソは*cholo*（チョロ）と呼ばれる。

先述のようにマリアテギは、先住民問題を土地問題としたが、センデロ・ルミノソが武装蜂起したときには、ペルーではすでに農地改革がおこなわれていた。南アメリカの近隣諸国では軍事政権は左翼系の人々にとって抑圧的に働いた。しかし、ペルーではむしろフアン・ベラスコ・アルバラード将軍による軍事政権下（1968–1975）で「ペルー革命」が実行され、大規模な農地改革がおこなわれている。ベラスコ政権はチリの社会主義政権アジェンデ政権とも友好関係にあった。ベラスコ政権は、「インディオ共同体」の「インディオ（indio）」[10] を差別的な響きがあるものとして「農民共同体」とし、「インディオ」を「農民」とした。他方で、ケチュア語をスペイン語と並んでペルーの公用語としている。しかし、ベラスコ大統領が病気になることで、軍事政権による革命の実現は頓挫した。

ベラスコ政権が実行した農地改革により、大土地所有者（hacendadoアセンダード）が所有していた土地は農民共同体のものとなった。これにより、農村部で権力層を構成していた大土地所有者のプレゼンスが弱まった。農地改革以前は、先住民＝農民が土地の収奪や搾取をめぐって農民運動を展開すると、大土地所有者たちは政府軍を導入することで鎮圧してきた。

山岳部の農村地域で絶対的権力を有してきた大土地所有者たちの権力が及ばなくなったことは、センデロ・ルミノソが勢力拡大することを可能にした。他方で、農村部ではベラスコ政権がおこなった村長を中心とする共同体組織の導入により、伝統的政治宗教的権威組織であるバラヨックの権威が弱体化する移行状況にあった。

4　先住民村出身のアーティストと紛争の記録

ここで、アヤクチョ県のケチュア語話者の村出身で、自身もケチュア語とスペイン語のバイリンガルであるエディルベルト・ヒメネスの作品を手掛かりに、先住民の人々とセンデロ・ルミノソの関係、及び先住民の人々の紛争経験についてみてい

---

10) スペイン語のindio（インディオ）は差別的な響きがあり、スペイン語圏では使用されない。英語圏でもたとばアメリカ合衆国ではindianインディアンではなくnative americanという単語が用いられる。スペイン語圏では一般には英語のindigenous people（先住民）に相当するindígenaという言葉が用いられる。

くことにしよう。エディルベルトの父は、レタブロ[11]作家として知られるフロレンティノ・ヒメネスである。

父の仕事を受け継ぐレタブロ一家に生まれたエディルベルトは、彼自身もレタブロ作品をつくるようになっていった。一方で、彼は国立ワマンガ大学で文化人類学を学んだ。父のフロレンティノ・ヒメネスを含むエディルベルトの家族は、紛争が激しくなっていくなかリマに移住し、彼の兄弟たちはさらにイタリアやアメリカ合衆国に移住していった。しかし、エディルベルトは一人でアヤクチョに留まり続けた。そして、紛争がおさまると、バイリンガルであることを生かして、人権NGOやペルー真実和解委員会で仕事をするようになった。

エディルベルトは1980年代後半から、紛争を題材とするレタブロ作品をつくるようになった。その後、紛争が終結に向かうなか堪能なケチュア語と農村部での豊富な仕事経験を背景に、人権NGOのメンバーとしてアヤクチョ県のチュンギ地区で先住民の人々から紛争の時代の証言を収集する聞き取り調査を実施した。エディルベルトは真実和解委員会の調査も手伝っている。

紛争の時代についてインタビューし、証言を集める作業は困難を伴う。筆舌に尽くしがたい経験をした人々が、語りながらときには思い出し、泣き出すことも珍しくない。時系列が秩序立ち、ナレーションのかたちをとっているときは、ある程度本人が精神的に回復に向かっていることを意味するが、深いPTSD（Posttraumatic Stress Disorder心的外傷後ストレス障害）にある人々は、混乱のなかにあり過去の経験の時系列がばらばらになり、ある時期の記憶がすっぽり抜け落ちてしまっていることすらある。しかも、エディルベルト自身もアヤクチョ県で生まれ育ち紛争を経験し、血縁者や友人たちのなかに犠牲となった人々がいる当事者でもある。

エディルベルトによると、彼は証言をききながらノートをとりだして詳しくメモをとったり、録音機を取り出して録音の許可をとることができなかったとき、その場では彼のみがわかる記号等をメモし、後で証言を思い出しながら線描画を描くようになった。それらの絵は、公開することを目的としたものではなかった。西洋的な美術教育を受けたことがないエディルベルトの線描画は、2次元になってもレタブロの筆致を残している。そのようななか、NGOの同僚が彼の絵をみて公開するこ

---

[11] レタブロは、もともとはキリスト教の携帯用の祭壇であり、扉のある木製の箱の中にキリストや聖人像などがおさめられていた。アヤクチョ県では、家畜儀礼の際に家畜の守護神をおさめたレタブロが祭壇におかれる。しかしながら、1940年代におこったインディヘニスモにおいて先住民文化復興の運動がおこることでアンデスの人々の日常生活や祭り等を題材とするレタブロが生まれた。このインディヘニスモは先述のように非先住民による先住民文化の称揚というかたちをとってはいたが、フロレンティノ・ヒメネスや、ロペス・アンタイなどの先住民のアーティストが生まれ、レタブロはアヤクチョ県を代表する民衆芸術になる一方、トゥーリスト・アートとなり、土産物屋で広く売られるようになっていった。日本にある中南米の雑貨等を販売する店でも、現地で土産物として売られている小さなレタブロを見かけることがある。

とを思い立った。こうして、先住民の人々による証言と、それをもとに描かれた線描画を併置した展覧会が開催され、さらに『チュンギ（*Chungui*）』（Jiménez 2005）というタイトルで書籍として出版されるにいたった[12]。NGOから出版された本は、その後ペルー研究所の所長であったカルロス・イヴァン・デグレゴリ博士の支援でさらに充実したかたちで2007年にペルー研究所からも出版された（Jiménez 2010）[13]。

エディルベルトの線描画作品は、先述のように人々の証言とセットになっている。アンデスでは植民地時代にワマン・ポマ・デ・アヤラというクロニスタ（年代記者）がいる[14]。彼は先住民の血を受け継いでおり、文字がなかったアンデスで、征服後の初期段階でスペイン語を習得し記録を残した。スペイン語として洗練されていないことへの偏見もみられたが、絵と記録がセットになっている貴重な記録として、現在は多くの研究者が研究に取り組んでいる。証言と絵がセットとなったエディルベルトの線描画は、この植民地時代の記録者ワマン・ポマ・デ・アヤラの記録とその位置づけを彷彿させる。

5　先住民の紛争経験

ここで『チュンギ』（Jiménez 2010）に掲載されている先住民の人々の証言と絵を手がかりに、紛争の時代にどのようなことが起こったのかということを分析していくことにしよう。なお、翻訳と（　）内は筆者による。

5.1　センデロ・ルミノソの侵入と先住民

図2は、センデロ・ルミノソが村に侵入してきたときを描いている。この絵のもととなった証言では次のように語られている。

> 私たちは平穏に暮らしていました。一部の者が金持ちはいなくなるだろうと主張していました。
>
> 1983年12月4日武装した見知らぬ男女30名がチュンギにやって来て、村を

12）筆者は1988年にまだ紛争下であったアヤクチョ県でフロレンティノ・ヒメネス氏の家をはじめて訪れ、その際にエディルベルトが制作中の紛争を扱ったレタブロ作品を見て感銘を受けた。その後、ヒメネス家との付き合いが続いてきており、線描画の本が出版される直前の2005年に地域コンソーシアムの協力を得て、早稲田大学で日本ラテンアメリカ学会年次研究大会が開催された際に、エディルベルトを招いて作品の展覧会とパネルを開催し、その後国立民族学博物館でもシンポジウムを開催した。

13）ペルー研究所の図書館やデグレゴリ博士の研究室におかれていたエディルベルトのレタブロ作品は、デグレゴリ博士の1周忌にあたる2012年にペルー研究所の分館に展示室が設けられ公開されることになった。1周忌にはあわせてエディルベルトのレタブロ作品に関する本が出版されている（Golthe,Pajuelo eds. 2012）。

14）ワマン・ポマについてはGuaman Poma 1980、染田・友枝1992参照。

図2　出典　Jiménez 2010:138

くまなく見て回りました。

彼らは学校に入って教員と話した後[15]、私たちに金持ちはいなくなればならないと説明し、彼らの歌を歌わせました。その後、全ての住民を広場に集め、その前で、政府をかえ、金持ちはいなくならなければならず、すべての人々が平等にならなければならないと告げました。そして、役職者たちはやめさせ、彼らが信頼する人々を任命すると告げました。そのなかには、「デイヴィッド」、「ロシオ」、「アウレリオ」、「ミゲル」司令官がいて、部下として「フリオ」がいました。夜になるとパーティをしてギターをひき、村人たちに歌わせ、踊らせました。(Jiménez 2010：139)

ゲリラたちは本名ではなくコマンド名がつけられ、互いにコマンド名で呼び合っていた。センデロ・ルミノソのなかには女性も少なくなかった。

アンデスの村や街は、スペインの街の構造を踏襲しており、村の中心に広場があ

[15] 学校の教員のなかには先述のようにセンデロ・ルミノソに加わっている人々もいた。センデロ・ルミノソは村の学校を用いて革命教育をおこなったが、しかし、逆に教員がセンデロ・ルミノソに従わない場合は教員を殺害した。

り、その周囲に教会、役場、学校など村の主要な建物がある。村にやってきたセンデロ・ルミノソのメンバーたちは村人たちに命令するためにまず、村人たちを広場に集めている。絵の右上には教会が描かれている。

中央にいるリーダーと思しき男性が手に持っているパンフレットらしきものに描かれているのはセンデロ・ルミノソのシンボルである。鎌と槌の組み合わせは、共産主義のシンボルとして使われ、農民と労働者の団結を表す。ソビエト連邦の国旗、中国共産党、ベトナム共産党、カンボジア共産党の党旗として用いられてきている。PCP－SLは党の正式名、「ペルー共産党―センデロ・ルミノソ」の略である。

興味深いのはセンデロ・ルミノソの男性メンバーたちが靴を履いている点である。これは彼らが先住民ではなくミスティであったことを示す。先述のように、アヤクチョ県の村では古タイヤでつくったサンダルのオホタを履かなくなった人々を*qala*と呼び、「我々」と区別する。広場に集められた村人のほとんどはオホタを履いている。しかし、センデロ・ルミノソのメンバーの女性のなかにはオホタを履いているものもいる。二人の女性はスカートに毛糸のレギンスをはき、マンタと呼ばれる毛織物でできた風呂敷包みを背負い、アンデスの女性に近い格好をしている。もしかしたら二人はどこかの村でセンデロ・ルミノソにリクルートされたのかもしれない。

武器に関しては、描かれたセンデロ・ルミノソのメンバーたちは猟銃のような銃を所持している。当時のセンデロ・ルミノソはこのような銃やダイナマイトを武器としており、最新鋭の武器をもっていたわけではない。しかし、武器がなくケチュア語でワラカ（*warak'a*）、スペイン語でオンダ（onda）と呼ばれる投石器や山刀等の武器で抵抗していた村人たちに対しては効果があった。その後フジモリ政権下で、センデロ・ルミノソと闘うために農村部の人々に武器が配られた。

ちなみにギターも、村の人々とは異なるミスティの文化である。アヤクチョ県は民族音楽ワイノをはじめとするその豊かな音楽で知られる。都市部では国際的に広く知られるラウル・ガルシアをはじめとする、ギターの名手が生まれている。1990年に筆者がクスコ市でアヤクチョ県からの移住者について調査した際、移住者たちは自らの文化的アイデンティティの基盤として、また自分たちがテロリストではないことを示すために、ラジオ局のなかにアヤクチョの音楽を専門に流す音楽番組を開設していた。アヤクチョ県の人々にとって故郷の音楽はアイデンティティの核であったのである。

都市部の人々に比して、先住民の人々の村では伝統的にギターは楽器として用いられてきていない。祭りの際等に、村の音楽家たちが演奏する楽器は、バイオリン、アルパと呼ばれるインディアンハープ、縦笛のケーナ、サンポーニャ等である。宗教音楽にも用いられるバイオリンは、先住民の間で古くから使用されており手作りもされている。筆者はアヤクチョ県の村でおこなわれた水の祭りで、伝統的音楽で

あるハラウィのコンクールがおこなわれた際に、村人たちがギターでハラウィを演奏したグループを認めるべきかどうか議論している場に遭遇したことがある。

> 集会で、(センデロ・ルミノソは)「党の同士諸君、富者も貧者もなく、我々は皆平等だ。みんなが肉やパンや米を食べ、不平等はなくなる。権力の乱用や搾取はなくなる。そのための武装闘争であり、そのために党はある」と告げました。
>
> 私たちは全員広場に集められました。彼らは武器を持っていたので、誰もその場から立ち去ることができませんでした。そして、すでに夜になってから「同志たちよ、二人の卑劣な輩どもは、サン・ペドロに行った。党は権力を乱用する者、従わない者を罰していくだろう」と告げました。続いて、大人と子どもに分かれて全員一列に並ぶように命じ、ラウル・ヒメネスの店に入って商品をもちだし、全員にすべてを、砂糖、食用油、石鹸、服、靴、帽子、ロウソクなどを配りました。その後、彼らは酒を飲みだし、音楽を演奏しながら酔っぱらいました。
>
> 私たちは、ラウル氏とレオニダス氏を探しました。彼らはすでに死んでいました。二人は夕方5時頃に殺されました。ラウル・ヒメネス氏は家で殺されていて、牛の毛皮で覆われ、何度も刺されてあたりは血の海でした。レオニダス・ロカ氏は、旧役場で同様に刺されて死んでいました。ラウル氏に対しては、権力を乱用しているガモナルだといって殺害し、村長のレオニダス氏は、村長をやめなかったことで殺害しました。
>
> それが最初の殺害でした。彼らが殺されたことを知り私たちは泣き、同志たちに恐怖を抱き、恐怖から政府軍がきて自警団を組織するまで同志たちとともにいました。(前掲書：144)

「サン・ペドロに行く」というのは比喩的表現で「死ぬこと」を意味する。ここでは、センデロ・ルミノソによる村長と商店主の殺害が語られている。翻訳では示すことができないが、ラウル氏やレオニダス氏について描写するとき、証言者は「ドン（don)」という敬称を用いている。これは、誇り高き村の男たちがお互いに敬意を表して呼び合うときの敬称でもある。「ガモナル（gamonal)」というのは、権力を乱用する地域の有力者を意味し、農村部では農民を搾取する大土地所有者（アセンダド）を指す。村の商店主は、村の外の経済とつながることで、他の村人からみれば多少裕福にみえるかもしれない。自給自足的経済を営んでいる村のなかに小さな店舗をかまえ、都市から運んできた細々とした日常品を扱う。しかし、国内における圧倒的経済格差からみれば、同じように貧しい農民でしかない。

センデロ・ルミノソは、国外では「アンデスのクメール・ルージュ」とも呼ばれ

ていた。そこには、ある種の相関性がある。「ポル・ポトはその地域に暮らす少数民族、ジャライ人とプノン人の共同体に、アンコール王朝に先立つ、本源的な原始共産制、完全な共産主義を見出した。ポル・ポトはそれを発見し、明らかにし、ねつ造した。彼らは貨幣なしで生き、すべてを分かち合う。収穫、狩猟、漁労すべてだ。彼らは連帯し、汚れがない。」（パニュ、バタイユ2014：186–7）センデロ・ルミノソも同様に原始共産制を理想とし、農村部で市場を攻撃した。

他方で、歴史という視点からは、フランスの歴史学者ルイス・ボーデン（Louis Baudin）の『社会主義帝国インカ（*L'Empire Socialiste des Inka*）』（1928）のスペイン語訳が出版されている。ルイス・ボーデン自体は、社会主義に対して批判的であったが、この本は社会主義を実現していた国としてのインカ帝国という誤ったイメージをつくりだした。

センデロ・ルミノソの「みんなが肉やパンや米を食べ、不平等はなくなる」という言葉について、アンデスの村の人々の主食はジャガイモであり自ら栽培している。一方パン、米は店で買うものである。肉に関しても、人々は家畜を飼っているが、リャマ、アルパカ、羊は毛をとるためで、必ずしも食用のために飼育しているわけではない。祭りや家族の行事、客人を迎えるときなど、特別な機会に自らが飼育している牛やアルパカ、羊等を屠殺し肉を食べる。それ故、センデロ・ルミノソのメンバーのこの言葉には、逆にミスティの食習慣を良いものとし、村の人々を商品経済に依存させるかのような矛盾がみられる。

これら二つの証言には、村に侵入してきたセンデロ・ルミノソのメンバーたちが、農民＝先住民の生活への理解と想像力を欠き、彼らの革命とイデオロギーを人々に押しつけ暴力によって支配し、逆らう人々を殺害している様子が示されている。加えて、文化という観点からみれば、自らの文化的優越性を疑わずにふるまっていた様子が伺える。

> 午後に30人以上の同志がチリウアにきて、人々を村の集会所に集め、「我々は貧しい者たちのために闘っている」、「我々は新しい政府であり、我々が命令する」、「ベラウンデ政権は無効だ、大統領はゴンサロ同志だ」と告げました。
>
> 「全員が党と団結しなければならない」とし、「富んだ者のみが党を憎むので、富んだ者たちを殺さなければならない」と告げました。「党は千の目と千の耳をもっており、誰も裏切りことはできない」といいました。すばらしいことを話し、「人民の敵は汚職、レイプをする者、泥棒、呪術者であると気づき、打ち負かさなければならない」といいました。
>
> これらの歩きまわっている人々（原文通り）は余所者で、チュンギの出身ではありませんでした。リーダーたちはスペイン語しか話せませんでした。それ

で黙って受け入れざるをえませんでした。私たちは彼らが逆らう者を殺害し、すでにチュポンで役職者たちを殺害しているときいていたので、とても怖かったです。

彼らは私たちに党に入るようにパンフレットを渡し、各村の責任者を任命しました。

チルワでは3人の代表者を任命し、「責任者に従わなければならない、村の役職者だ」と告げました。新たに任命された人々は押し黙って膝間づき感謝しました。そして全員で「ペルー共産党万歳」「ゴンサロ大統領万歳」「武装闘争万歳」と党を称えて叫び、拳を突き上げました。同志たちのなかには女性や若者がいました。

旗は赤く鎌と槌が描かれていました。鎌は農民を、槌は労働者を表すといいました。そして、夜になるとオコロの方角に去って行きました。その後、新しい責任者は党の幹部となり、去った人々の命令を実行しました。それから地域の（反乱）軍の長が来ると、私たちの責任者と話しました。（前掲書：156）

センデロ・ルミノソのリーダーのグスマンは、「ゴンサロ大統領」とも呼ばれていた。センデロ・ルミノソは各村で責任者を任命し、恐怖によって支配した。そして、役場や警察、軍に密告することを禁じ、党を裏切ることがないよう「千の目」、「千の耳」で見張っているとした。この「千の目」という言葉はポル・ポト政権下でも使われている。

スペイン語での翻訳では「歩きまわっている人々」と訳されているが、これはケチュア語の*puriqkuna*（kunaは複数形をあらわす）からの訳であると考えられる。確かに字義通り訳せば「歩きまわる人々」であるが、紛争の時代には抑圧下で様々な隠語が発達した。最新の兵器をもつ政府軍が、アンデスの山奥にはヘリコプター、装甲車、トラック等で来るのに対して、センデロ・ルミノソは、徒歩で移動し村々を襲撃したことによる。さらに村への襲撃をはじめる以前に、センデロ・ルミノソのメンバーたちは、商人等を装い余所者として徒歩で村を訪れていた。これらのことから、「歩く人（*puriq*）」呼ばれるようになった。伝統的には内婚をしてきている村において、余所者が村を訪れるとあっという間にうわさが広まる。加えて、政府軍の攻撃は日中におこなわれたが、センデロ・ルミノソによる襲撃は夜おこなわれたため、ケチュア語で「*tuta puriqkuna*」すなわち「夜歩く人々」とも呼ばれた。

また、ここではケチュア語話者の村人たちに対して、ミスティであるセンデロ・ルミノソのリーダーたちがスペイン語しか話せなかったことについても言及されている。

5.2　紛争と村落内、村落間の争い

センデロ・ルミノソが村を支配し革命教育をおこなうなかで、村落内にもセンデロ・ルミノソに賛同し協力する者たちが生まれた。国内に圧倒的な差別と格差があり、個人の力ではどうにもならないなか、とりわけまだ柔軟で影響をうけやすく、かつ何かに情熱を注ぎたい思いを抱いている若者たちが、センデロ・ルミノソに加わることがあった。「イスラム国」に加わる若者たちにも共通する思いがあるかもしれない。一方で、センデロ・ルミノソの侵入が、村落内及び村落間に存在していた争いや利害関係と関わっていくこともあった。

> そのようにしてチュンギの全ての住民は党につき従いました。私たちは山に行き、村には誰にも残らないようにさせられました。従わないものは、裏切り者とみなされ、厳しく罰せられるか殺害されました。マウリノ・キスペ・フローレス氏はチュンチバンバで、「彼らは悪いことをしている、何をしているかわかっていない。無意味なことを勝手にやっているだけだ」といいました。マウリシオは黙らずに言い続けました。
>
> 気の毒なことに、マウリシオがいっていることを（誰かが）センデロ・ルミノソの幹部に告げたため、幹部はチュンチバンバで全員を集め、マウリシオ氏を呼び出し、党に反抗した悪事を告発し、むち打ちの罰を与えました。両手を縛り、膝間づかせ行いを正すよう20回以上むちで打ちました。彼らはマウリシオ氏を殺そうとしましたが、フェリックス・ヴィジャントイ氏が党の人々に命乞いをしたので助かりました。政府軍がチュンギに来ると、マウリシオ・キスペは軍に協力し自警団の団長に任命され、むち打たれたことへの復讐から残忍な狩人となり、センデロ・ルミノソのメンバーの容疑がある村人たちを殺害しました。
>
> マウリシオは、誰も手をだすことができない殺人者となり、人々は政府軍よりも彼を恐れ、恥知らずにも村人たちに対して暴虐を尽くしました。しかし、マウリシオは軍の手にかかって殺されました。マウリシオが権力を乱用し、村人たちを勝手にテロリストとしていることに（政府軍の）司令官「サムライ」が気づき殺害しました。チュスチ峡谷に埋まっているそうです。（前掲書：160）

筆者はアヤクチョ件の別の村で、センデロ・ルミノソに加わった村人が、村人たちを脅迫したために、村人全員でこの人物を殺害したという出来事についてきいている。アンデスの村にはもともと住民間の小さな争いは存在してきている。土地をめぐる争い、伝統的な宗教的政治権威組織バラヨックにおける権威の獲得、村の祭りのカルゴ（cargo責務）をひきうけ役割を分担する際の駆け引き等、日常的な争い

や駆け引きが存在している。閉鎖的で伝統的には村落内で婚姻を繰り返してきている小さな村のなかで、村人たちにどのようにみられるか、評価されるかということは重要であり、嫉妬や悪いうわさの対象にならないように人々は気を配っている。しかし、センデロ・ルミノソと政府軍の争いはこのような村落内における日常的な争いを拡大したのである。

紛争はさらに村落間の争いも拡大した。

> センデロ・ルミノソは私の村トトラにきて人々を巻き添えにし、私たちはセンデロ・ルミノソたちといることになりました。彼らが退却したときは、山や洞窟で暮らしました。村人の間、それから常に村の境界をめぐって争ってきたパリュカ村との間で憎悪が広がっていきました。オロンコイとチャピ出身のセンデロ・ルミノソたちの手助けによって、パリュカの人々が殺害されました。それで、復讐として1984年3月にパリュカの人々はポンチョと帽子を身につけた20名以上の警察リャパン・アティック（*llapan atiq*）とともに、トトラに攻撃にきました。それをみて、私たちはモロコチャ山，ミナスワイコ、チャウピロコに逃げました。そこからオンダで防衛しようとしましたが、政府軍はFAL（自動小銃）で撃ってきました。（中略）攻撃者たちが退却した後、私たちは家を見に戻りましたが、すべて焼き尽くされ、教会や家や学校は灰のなかで屋根がない状態にありました。
>
> 私たちの村の守護聖人聖母ロサリオや（教会の）鐘、学校のトタン屋根を持ち去りました。私たちは完全に燃えてしまった村の集会所で、隣人が柱に縛り付けられているのを見つけました。縛り付けて、生きたまま火をつけたと人々が語りました。また、セノビア・ラパという知的障害がある女性を強姦した後射殺したそうです。（前掲書：208）

農民にとって土地は重要であり、農村部では村の境界（lindero）をめぐって村落間でしばしば争いが起こる。隣村どうしが必ずしも仲がよいわけではない。筆者が長期にわたって調査したクスコ県の村では、年に一度村人たちが村の境界を歩く儀礼をおこなっていた（細谷1997）。この儀礼の際に、もし隣村のグループと遭遇すると戦いとなると語られている。

ここでは、もともと境界をめぐって敵対してきた村落どうしが、センデロ・ルミノソと政府軍の戦いに巻き込まれることで、村落間の争いが拡大したことが示されている。その結果、一方の村の自警団が政府軍と警察の襲撃に随行し、相手の村で略奪をおこなったことが語られている。筆者が調査したアヤクチョ県の別の地区でも紛争の間、もともと敵対していた他村の自警団による略奪がおこなわれている

（Hosoya2003、細谷2013）。紛争の間はこのように、潜在する村落間の敵対関係を基盤に、政府軍や警察に同行するかたちで攻撃と略奪が繰り広げられた。

5.3　子どもたちとセンデロ・ルミノソ、政府軍

センデロ・ルミノソは子どもの誘拐もおこなった。次の証言者は当時11才でその姉は14才だった。

> ある朝、同志が叫びながら村にやってきて、私の父の手を縄で縛り、「愚者め」といいながらナイフで胸を刺して殺しました。それから私たちを縛り、いっしょに行くのを拒むと殺そうとしました。私の母は、泣いて懇願し、今にも気を失いそうでしたが、母も殺そうとしました。それで、私と姉はセンデロ・ルミノソといっしょに行くことにしました。私の母はなす術もなく、泣き続け、私たちに危害を加えないことを請いながら、5才の妹とともに泣いていました。
>
> 私たちは逃げることができず、名前を変えられました。子どもたち全員に同志としての名前がつけられました。私は「ラウル」となり、姉は「カルメン」となりました。布でできた袋を持ち、そこに鎌と槌の刺繍をしました。袋にパンフレットと食べ物を入れ、村から村へと歩きました。（前掲書：176）

センデロ・ルミノソに誘拐された子どもたちは、同志としてのコマンド名がつけられ、過去を奪われ、党のために働くことを強要された。その後、証言者は姉とも別々の集団に入れられ、以来二度と姉と会うことは叶わず、姉は「行方不明」となった。当時、アヤクチョ県の農村部の人々は、子どもたちがセンデロ・ルミノソに連れ去られるのをふせぐため、家族や親戚を頼って子どもたちをアヤクチョ市やリマなどの都市部に送った[16]。

次も同様にセンデロ・ルミノソに誘拐された子どもの証言である。

> センデロ・ルミノソに連れ去られたとき、私は11歳になったばかりでした。ペルー共産党の基地14には、チュンギ区やアンコ区から連れて来られた男女約35名の子どもがいました。
>
> 私は、党の同志は罰するのでとても怖かった。命じられたらすぐに実行しなければなりませんでした。サウル司令官は私を彼の給仕とし、私はどこであろ

---

[16] このことは紛争後、都市で育った子どもたちと農村部の両親との関係に、生活習慣の相違や価値観の相違という距離をもたらした（細谷2005）。

うと彼の傍らにいて使えなければなりませんでした。しかし、司令官は軍に動物のように首を切られて殺されました。(前掲書：241)

少年はセンデロ・ルミノソの司令官といるときに、政府軍と戦闘になり捕らえられた。捕らえられた司令官は少年の目の前で、政府軍に残忍な方法で殺害された。いっしょにいた女性のセンデロ・ルミノソのメンバーは政府軍にレイプされた後殺害された。捕らえられた少年は、縛られていた縄がたまたま緩んだことで逃げだし、兵士たちは銃を撃ちながら追いかけてきたが、茂みの深い峡谷に逃げ込み何とか捕まらずにすんだ。「私は神のおかげで、寸でのところで死を免れることができ、現在も生きています」(前掲書：241) センデロ・ルミノソに誘拐された子どもたちは、政府軍に発見されると保護され救出されるどころか、センデロ・ルミノソの仲間として政府軍に殺害されたのである。

チュンギ地区の村のなかには、センデロ・ルミノソが村人全員に彼らと行動をともにすることを強制された村もあった。このような村の人々は、村を離れ必要最小限のものだけ持って、政府軍の追及を逃れ、移動に次ぐ移動の生活を強いられながら山中に隠れ住むことになった。しかし、食料を確保せねばならず、時々畑に農作業に行った。が、それは見張っている政府軍に発見されるという危険を伴っていた。人々は充分な食料がなく困窮した。センデロ・ルミノソは村を襲って食料を略奪した。

センデロ・ルミノソと行動をともにすることを強制された子どもたちは「パイオニア」と呼ばれた。(図3)

私たちに歌わせ、ぼろ切れでできたボールで遊ばせ、また棒を持たせました。それが私たちの武器で、逃げるときはばらばらにならず二人ずつでにげるように教えられました。私たちは個人主義者になることもできませんでした。私たち全員が食べるかお腹をすかせていなければなりませんでした。(前掲書：182)

センデロ・ルミノソはポル・ポト政権と同様に、家族関係を尊重することはなかった。夫と妻は引き離され、子どもは両親と引き離された。家族の絆よりも党を尊重することが奨励された。センデロ・ルミノソの革命歌を教え込み、子どもたちは個人であるよりも前に党に忠誠をつくし、党のために働くことを強制され「個人主義」を批判された。

私はパイオニアの子どもとして、他の子どもたちといっしょにいました。私は7才になったばかりでしたが、いつも私の母から引き離されていました。一度、

図3　出典　Jiménez 2010:183

お腹をすかせて、こっそりとサトウキビ畑にいってサトウキビを食べました。戻ってきたとき、リーダーは子どもたち全員を輪にし、私に服を全部脱ぐように命じました。そして、輪の中心で、私を気絶するまでむち打って罰しました。目を覚ましたとき、立ち上がることができませんでした。ある子どもが、私を母のそばに連れて行ってくれました。母はただ悲痛なまなざしで私をみつめるだけでした。処罰が正当であることを伝えるため、リーダーは（私をむち打ちながら）「どうしてサトウキビを食べに行ったのだ」、」「どうして個人主義なのだ」と問いました。（前掲書：185）

大人も子どもも食料が不足し腹をすかしていたなか、まだ幼かった子どもがサトウキビ畑に行ってサトウキビをかじった。甘いサトウキビの茎は、平時であれば子どもたちに与えられるおやつである。しかし、党は腹をすかせた子どものこのような行為も、「個人主義」とし厳しく罰した。

母親は、裸にされむち打たれた我が子を助けたいと思っても、もし手を差し伸べれば再びより苛酷な罰を、場合によっては殺されるかもしれないしれない罰を我が子がうけるかもしれないため、黙ってみつめることしかできなかった。

政府軍による追跡が益々厳しくなってくると、逃げる際に政府軍にみつからない

よう、センデロ・ルミノソは母親たちに赤子や小さな子どもを殺害することを命令してすらいる。(前掲書：228)

5.4　政府軍と先住民

センデロ・ルミノソだけでなく、政府軍も村人たちに残虐な行為で恐怖を植え付け殺害した。

> (村の人々を広場に集めた後) 私たちの前にルミチャカの村人を連れてきて、「このテロリスト野郎、生きたければすべて話せ」といった。そのとき、彼の耳を切り食べさせた。彼は黙って涙を流しながら自分の耳を食べた。
>
> 続けて、私たちを一人一人を呼びはじめ、間髪入れず撃った。(中略) その日6人の村人が亡くなった。(中略) 政府軍は「我々は全ての反乱者を殺す、(反政府組織に) 加わらないように気をつけろ」といった。(前掲書：162)

政府軍が、先住民の人々に対しておこなった殺戮は無差別で残虐を極めた。

> 政府軍は、上司に伝えるために腕や耳を切り落とした。(中略) 命は何の価値もなかった。政府軍はヘリコプターでやってきて、私たちは隠れた。誰一人私たちを守ってはくれず、私たちは動物のように狩られた。現在でも私たちは忘れられたままだ。(前掲書：242)

政府軍は子どもたちに対しても容赦なかった。

> その日、政府軍と民兵は女性たちを捕らえ、子どもたちを奪い家に閉じ込めました。初めに女性たちを殺し、その後子どもたち全員を殺害しました。私はこの目で、部屋に閉じ込められナイフで殺害されたすべての子どもたちをみました。あたりは血でいっぱいで、そのなかに私の2才の息子を見つけました。縄で首を絞められたようでした。(前掲書：216)

政府軍はなぜ、無抵抗の子どもや赤ん坊まで大量に殺害しなければならなかったのか、筆者はエディルベルトに尋ねた。エディルベルトは、それは政府軍が雑草はもとから絶たなければならないと考えたためであると答えている。つまり、雑草は根から絶たないと次から次に生えてくる。それ故、政府軍は反政府組織を根絶するために子どもたちを殺害していった。センデロ・ルミンソも同様である。党に反する分子の子どもたちを「雑草」とみなし、殺害することはポル・ポト政権下でもみ

られた。

5.5　女性への暴力

近年、紛争とジェンダーの関係への関心が高まっているが、女性に対してセンデロ・ルミノソ、政府軍双方による性的暴力、レイプがみられた。

> 政府軍は毎日近隣の村々にパトロールにでて、痩せこけ、汚れ、髪がぼさぼさでシラミがわいた気の毒な逮捕者を連行してきました。その多くはアシエンダ（オレハ・デ・ペロ）の人々でした。若くてきれいな女性たちもいて恥知らずな政府軍の兵士たちに利用されました。（前掲書：257）

政府軍は女性である証言者に、捕らえた女性たちをレイプするため、彼女たちを川に連れていき体を洗うことを命じた。捕らえられた女性たちは着替える服もなく裸のまま牢屋に入れられた。そして、一晩中何人もの兵士にレイプされ続けたため、性器が腫れ上がり歩くことすらできなくなった。「その後、その女性たちは姿を消しました。チュスチワイコで殺害されたのです」（前掲書：257）

筆者が調査をしたアヤクチョ県の某村では、政府軍の兵士たちが3人の15歳～16歳の村の少女たちをレイプし谷に捨てている（細谷2005）。政府軍が無実の人々にどんなに残虐な行為をしても、テロリストであったとすることで正当化することができた。つまり、政府軍や警察は、誰でもテロリストの容疑者とすることができ、裁判等が実施されない以上、テロリストの容疑をかけられることはテロリストであることを意味することとなった。個人的な利害関係に基づく密告も横行した。

また、命が助かったとしても夫を政府軍、警察、自警団（民兵）等の国家エージェントに殺害され未亡人となった女性たちへの扱いは苛酷であった。（図4）

> （前略）私の母は逃げることがかなわず、モリェバンバで民兵にナイフで殺されました。私の6才の息子は、民兵が来るのを見て走って逃げようとしましたが、殺害されました。私の夫ブライリィオ・カストロも、プチュホリョの野営地の近くで捕まり、蹴られ、切り殺されました。それから、私は他の村人たちとともに捕らえられ、モリェバンバの軍の基地に連れて行かれ、そこで学校に閉じ込められました。殺されそうになりましたが、先生が「どうして殺すのだ、私が彼女の命を保証する」といってくれたので命が助かりました。彼は私を家に連れていってくれましたが、その後、政府軍の基地に連れていかれ、そこで私は軍のために食事を作っていました。オロンコイ、チャピ、ワルワ出身の多くの女性たちが捕らえられていました。

図4　出典　Jiménez 2010:254

民兵や政府軍は権力を乱用し、女性を尊重せず、とりわけ未亡人の扱いはひどいものでした。民兵たちは軍の基地に来て、軍の司令官にあの女性が気に入ったというと、司令官は妻にするよう民兵に渡しました。軍は女性たちへの同情もなく、私の今の夫も軍の司令官に私と結婚したいといい、軍は私に「今から彼がお前の夫だ、受け入れなければならないと」といいながら渡しました。

私は子どもたちのために受け入れました。私に何ができたでしょう？もし逆らえば殺すと脅かされていたのですから。(前掲書：255)

女性は名ばかりの妻として、実際には奴隷のようにやりとりされた。とりわけ幼子を抱えて未亡人となった女性たちは、子どもたちの命を守るため甘んじて受け入れざるをえなかったのである。

6　おわりに―紛争とコロニアル・レガシー

センデロ・ルミノソのリーダー、グスマンは1992年9月12日に逮捕された。カリスマ的リーダーの逮捕により、センデロ・ルミノソによるテロ活動は鎮静化していった。現在センデロ・ルミノソは、武装闘争をやめ合法的な政党となることを目指す

グループ「恩赦と基本的権利のための運動（Movimiento por la Amnistía y Derechos Fundamentales：MOVADEF）」と、コカの栽培地域における麻薬密売業者のいわば傭兵となっているグループにわかれている。

これまでみてきたように、センデロ・ルミノソと、彼らが「解放」しようとした人々は、知識人と農民という関係だけでなく、人種、民族的背景、文化が異なっているというかたちではじまっている。しかも、ゲリラと民間人の区別がつかないまま政府軍による民間人の大規模な殺戮がおこなわれた。同じ国家内でありながら、政府軍にとっては人種、民族、文化的背景が異なる先住民の人々は、異なる国の人々のようであり、そこに人種差別も加わった。政府軍にはベトナム戦争下のアメリカ軍によるソンミ村虐殺事件のような対応がみられたのである。

しかし、これに加えてペルーの紛争において重要な点は、主として80年代に山岳部の先住民地域で反政府組織と政府軍による大規模な虐殺がおこなわれている間、白人やメスティソを中心に構成される首都の中産階級以上の人々は、山岳部の先住民地域で大規模な虐殺が起こっていたことすら知らなかったという点である。首都の中産階級以上の人々が住む地域で、センデロ・ルミノソによる本格的な攻撃がはじまったのは1992年のことであった。1988年までは首都のスタンド等でセンデロ・ルミノソのコントロール下にある新聞が販売されていた。そして、首都でのセンデロ・ルミノソの本格的な攻撃が始まるまでは、左翼系の人々のなかには、センデロ・ルミノソをチェ・ゲバラの頃のゲリラのイメージでとらえる人々も少なくなかった。

一般にゲリラは無関係の民間人を傷つけないことを目指し、テロリストは無差別の攻撃をおこなうと理解される。ゲリラとテロリストは実際には政治的に操作されてきた区別でもある。これはアメリカ合衆国でおこった同時多発テロ以降顕著である。しかし、チェ・ゲバラによる世界革命の後にあらわれたセンデロ・ルミノソに関して、農民のために革命をしているセンデロ・ルミノソが農民を傷つけるはずがない、と考える左翼系の人々は少なくなかった。センデロ・ルミノソの姿が左翼系の人々の間で明確に理解されるようになったのは、リマのヴィージャ・エルサルバドル[17]で、住民運動のリーダーであったマリア・エレナ・モヤノが1992年2月15日にセンデロ・ルミノソによって殺害されて以降のことである。同年に首都の中産階級以上の人々が住む地区でセンデロ・ルミノソによる本格的な攻撃がはじまり、続けて4月にはフジモリ大統領による無血の自主クーデター、グスマンの逮捕がおこなわれている。

紛争後、ペルーでは紛争が激しかった1985年から1990年に大統領であったアプ

---

[17] 山岳部からのリマ首都圏への移住者が急増するなか、ベラスコ時代に住む場所がなくあいている土地を不法占拠して住みつくスクオッターの人々を支援するプエブロ・ホーベンとしてはじまり、その後一つの街へと発展した。活発な住民運動で知られる。

ラ党のアラン・ガルシア大統領が2006年の選挙で再選されている。紛争は、民主主義の問題にすり替えられた。しかし、ペルーでは実際には多くの犠牲者が生まれたのは「民主政権」下である。真実和解委員会は調査時に、4600以上の秘密墓地の存在を確認したが、真実和解委員会の調査時に発掘調査がおこなわれたのは、わずか3箇所であった。その後も秘密墓地の発掘は進展せず、筆者が発掘調査に携わる政府期間で2011年にインタビューした時点でも発掘調査がおこなわれた秘密墓地は20に満たなかった。つまり、アンデス地域では膨大な数の秘密墓地が未発掘のままになっており、そこに行方不明者たちが眠っている。これらの死者たちは、死者たちを記憶する人々が死者となっていくことで、二度抹殺される。

本稿では、先住民が農民を構成するラテンアメリカの事例を扱った。外来の思想、革命運動としての毛沢東主義が輸入されローカライズされたとき、コロニアル・レガシーとしての人種主義と遭遇することになった。そして、このことは先住民の大規模な虐殺という結果を生むことになった。

しかし、なぜ人間は大量の人々を殺すのだろう。無意味としか思えないほど。筆者はあるジャーナリストがたまたま撮影した殺戮者として知られるセンデロ・ルミノソのメンバーのインタビュー映像をみる機会を得た。彼は、なぜかつて自分が多くの人々を殺害したのかわからないと語っていた。

> 悪の凡庸さ。この表現は魅力的で、多くの誤解を許している。私はその点を警戒する。確かにハンナ・アーレントが示す凡庸な人間は、その言葉、ビジョンによって悪を凡庸化している。それゆえ、私はこの表現を「悪の凡庸化」と理解する。（中略）虐殺者のなかにも普通の人々がいる、あるいは平凡な人間が虐殺者になり得ることを否定するわけではない。しかし私は、個人をその唯一性において信じる。（中略）悪を神聖化も凡庸化もすべきではない。（パニュ、バタイユ2014：244–245）

なぜ人間が人間を大量に虐殺するのか、私たちにはこの問いに向き合う思想が必要とされている。

参考文献

アルゲダス、ホセ・マリア
1988「ペルーにおけるインディヘニスモの存在理由」細谷広美訳　現代思想『特集ラテンアメリカ―増殖するモニュメント』8月号p61～70
アンダーソン，ベネディクト
2007『定本 想像の共同体：ナショナリズムの起源と流行』、白石隆・白石さや訳、

書籍工房早山
小倉英敬
2002『アンデスからの暁光―マリアテギ論集』現代企画室
2012『マリアテギとアヤ・デ・ラ・トーレ―1920年代ペルー社会思想史試論』新泉社
ゲバラ、エルネスト・チェ
2004『モーターサイクル・ダイアリーズ』棚橋加奈江訳、角川文庫
染田秀藤、友枝啓泰
1992『アンデスの記録者ワマン・ポマーインディオが描いた《真実》』平凡社
パニュ、リティ，クリストフ・バタイユ
2014『消去：虐殺を逃れた映画作家が語るクメール・ルージュの記憶と真実』現代企画室
細谷広美
1997『アンデスの宗教的世界：ペルーにおける山の神信仰の現在性』明石書店
2005「暴力の時代の歴史化をめぐる断章―証言と余白」関雄二・木村秀雄編『歴史の山脈―日本人によるアンデス研究の回廊と展望―』国立民族学博物館調査報告55 pp.189–199
2013「人権のグローバル化と先住民：ペルーにおける紛争、真実委員会、平和構築」文化人類学 77(4) pp.566–587
細谷広美編
2012『ペルーを知るための66章』明石書店
マリアテギ、ホセ・カルロス
1988『ペルーの現実解釈のための七試論』原田金一郎訳、拓殖書房新社
1995『インディアスと西洋の狭間で―マリアテギ政治・文化論集（インディアス群書）』辻豊治、小林致広訳、現代企画室

Comisión de la Verdad y Reconciliación
2003 *Informe final*
Guaman Poma de Ayala, Felipe
1980[1615] *Nueva crónica y buen gobierno*. John V. Murra y Rolena Adorno, eds.; traducciones del quechua por Jorge L. Urioste. 3 tomos. México D.F.: Siglo Veintiuno.
Hiromi Hosoya
2003 *La memoria post-colonial : tiempo, espacio y discursos sobre los sucesos de Uchuraccay* IEP
Golthe, Jürgen & Ramón Pajuelo

2012 *Universos de memoria:Retablos de Edilberto Jiménez sobre la violencia política* IEP

Isbell, Billie Jean

1985 *To Defend Ourselves: Ecology and Ritual in an Andean Village.* Waveland Pr Inc

Jiménez, Edilberto

2005 *Chungui* COMISEDH

2010 *Chungui: Violencia y trazos de memoria* IEP, COMISEDH, DED-ZFD